ビエンチャンのエスニックな景観

岡本耕平(名古屋大学)

1 はじめに

ビエンチャンはラオス人民民主共和国の首都である. 2003 年, 筆者は思いがけなくビエンチャン平野をフィールドとする研究プロジェクトに加わることになった. それまでラオスには何の縁もなかった. 貧弱な蔵書の中でビエンチャンについてなにがしかが書かれているのは、さいとうたかお氏の劇画ゴルゴ 13 シリーズの『ラオスのけし』だけだった.

この作品の冒頭は、「ラオスには、ふたつの都がある。 偉大なる黄金仏の都といわれる王都ルアンプラバン、そ して政治首都ビエンチャンである」という書き出しで始 まる(さいとう 1974). CIA(アメリカ中央情報局)から、 ラオス・ミャンマー・中国雲南省に跨る山岳地域に潜む 謎の麻薬密売人の抹殺の依頼を受けたプロの暗殺者であ る<ゴルゴ13>は、まずビエンチャンに潜入し、CIA の連絡役に会うため酒場「ラ・プペの店」に向かう。木 造家屋が建ち並ぶ暗い道を抜け仏教寺院オントウ寺につ くと、その裏にフランス語のネオンの光る酒場「ラ・プ ペの店」があった. 店に入ると, フランス外人部隊くずれの連中や娼婦達がたむろしていた・・・.

この作品が最初に発表されたのは1971年2月である.1975年,ベトナム戦争終結に呼応してラオスでも共産主義勢力が勝利するが,それまでのラオスは内戦状態にあり,この作品に描かれているのは,内戦期のビエンチャンやラオスの風景である.そこには、アメリカ人やフランス人、ロシア(ソ連)人、中国人といった多様な人々が登場する.

一方,2003年に初めてビエンチャンを訪れたときに 眼にしたのも、中華街やベトナム系商店街、フランス語 の看板を掲げる官庁や学校、街を歩くたくさんの西洋人 バックパッカーたちなど、多様な民族的光景であった。 本稿では、こうしたビエンチャンのエスニックな景観を 近代以降の歴史を交えて素描する.

Ⅱ ビエンチャンのエスニックな歴史

もともと、ラオスは極めて多種の民族・言語集団から なる多民族国家である。東南アジア大陸部諸国の中では



写真1 ラオスの国会議事堂 (2007年9月23日 著者撮影)

ラオス人民民主共和国の建国 15 周年を記念して 1990 年に建設された。前面の重なった3つの 鋭角の三角形は、ラオス寺院の伝統的な屋根をモチーフにするとともに、ラオスの3つの民族の統 合を表している(Askew et al 2007)



写真2 ラオスの1000キープ紙幣

3人の女性は、左からラオ・スーン、ラオ・ルム、ラオ・トゥン、中央右寄りに描かれた建物は、ビエンチャンにあるタートルアン寺院で、国民のアイデンティティの象徴、実際の色は金色である。右端の円形のマーク(ラオス国旗の中央にある図章と同一)の中にもタートルアン寺院が描かれている。なお、1000キープは、約10円(2010年現在)。

最も多様な民族構成であり、それをいかに分類するかが研究者の間で長年議論されてきた (Messerli et al 2008). 例えば、林(1998)は、42の言語集団を、ラオ・タイ語族(Lao-Thai)、モン・カメーン語族(Mom -Khmer)、モング・ヤオ語族(Mong-Yao)、チベット・ビルマ語族(Tibet-Phama)、ウイエト・ムアン語族(Wiet-Muang)、ハーン語族(Han)の6グループに分類した.

そのほか、47民族、68民族など様々な議論があったが、2008年の第6期第6回国会において、ラオス国民はラオ・タイ語族 (Lao-Tai)、モーン・クメール語族 (Mon-Khmer)、モン・ミエン語族 (Hmong-Mien)、シナ・チベット語族 (Sino-Tibetan) の4つの語族に分類され、49民族によって構成されると公式に認定された(山田 2009).

ところが、これまでは政府や国民の間では、民族を居住地の高度によって3つに分ける方法が使われ、すでに定着している。すなわち、ラオ・ルム(低地ラオLaoLum)、ラオ・トゥン(山腹ラオLaoThoeng)、ラオ・スン(高地ラオLaoSung)の3分類である。ラオ・ルムは低地で稲作、ラオ・トゥンは山腹で焼畑、ラオ・スーンは高地で焼畑や換金作物栽培に従事するというように、3民族は居住高度のみならず主要な生業とも結びついて認識されてきた。写真1は、1990年に建設された新しい国会議事堂であるが、前面の3つの三角形は、これら3民族を象徴している。また、現在使われている1000キープ紙幣のデザインに使われている3人の女性も、ラオスの3民族を表している(写真2)。この3民族分類にかわって、国会が認定した新しい分類方法が普

及するかどうかは、今の時点では分からない。ビエンチャン周辺はラオ・タイ語族が卓越するが、北側のサイソンボーン県やシェンクワン県からの人口流入によってモン・ミエン語族の集住地区もある (Messerli et al 2008).

さて、こうした民族構成のラオスをフランスは 1899 年にフランス領インドシナに編入した.以下、Askew et al(2007) の著作を中心に、フランスの植民地時代から人民民主共和国成立までの状況を概観する.

フランスによる植民地化はビエンチャンのエスニック な景観に大きな影響を与えた. それは、同じフランス領 のベトナムから、多くのベトナム人が流入したことであ る. ラオスに赴任したフランス人の数はあまり多くなく. 行政の主たる担い手はベトナム人であった. 1930年代 には、ラオスの官僚の半数以上がベトナム人であり、ラ オス人には下級の仕事しか任されなかった. 官僚資格試 験が 1928 年までハノイとサイゴンのみでおこなわれて いたこと、植民地政府で使われる言語がフランス語とべ トナム語だったことが、ベトナム人に有利に作用した. 官僚以外にも様々な職業のベトナム人がビエンチャンに 移り住み、ベトナム人街を形成した。1937年の統計に よれば、ビエンチャンには 10,200 人のベトナム人が住 み, ラオス人の 9,000 人より多かった. 1943 年の統計 でも、ラオス人 9.570 人に対し、ベトナム人は 12.400 人、 中国人 900 人であった. しかも, ラオス人のうちの半 分近くは郊外の農村に住んでいた. フランス植民地時代 のビエンチャンは、フランス人とベトナム人の町であっ tc.



写真3 かつてのホテル・コンステラシオン(白い建物) (2007年9月23日 著者撮影) 内戦期のビエンチャンで、社交や諜報戦が繰り広げられた。今は、アジアパビリオン・ホテルと名前を変え、中級のホテルとして営業しているが、昔の面影はない。

1940年代になると、日本軍が南進政策によりインド シナ地域に進駐してきた. 第2次大戦中, フランス本国 がドイツ軍に侵攻されドイツ軍に協力的なビシー政権と なったこともあり、フランス領インドシナでは一時期, フランス植民地政府と日本軍が共存していた. しかし, 1944年にフランス本国でビシー政権が崩壊し、ド・ゴー ル率いるフランス共和国臨時政府が樹立されると、フラ ンス植民地政府と日本軍の関係は微妙なものとなり, つ いに 1945 年 3 月、日本軍はフランス植民地政府軍を攻 撃、敗退させた、日本軍はベトナム、ラオス、カンボジ アのフランスからの独立を企て、ラオスでは、1945年 4月に日本軍の後押しでルアンプラバン王がラオスの独 立を発表した。しかし、日本は同年8月15日に連合国 に降伏. すぐにフランスはインドシナに軍隊を送り失地 回復を図った. 戦後しばらくの間, フランスはラオスで 権益を持ち続けた. ラオスがフランスから完全に独立す るのは 1953 年になってからである.

戦後,ビエンチャンでは,ベトナム人の数が激減した. 1955年の統計ではベトナム人は 1,700人であり, 10年前に比べて1万人以上減った。ベトナムでホーチミン率いるベトミンがフランスとの間で独立をめぐって戦争状態となり、ビエンチャンにいたベトナム人にベトミンのシンパが多かったこともあり、ビエンチャンのベトナム人はフランス人の報復の対象となったためである。公

務員のポストは、ラオス人が占めるようになった.

ベトナム人に代わって、ビエンチャンで多数を占めるようになった外国人は中国人である。1955年の統計では2,700人であるが(Askew et al 2007)、1959年の台湾による調査では1959年のビエンチャンの華人人口は約12,000人であった(山下2006)。いずれにせよ、中国人は戦後のビエンチャンの主要な商業の担い手になっていく。ビエンチャン中心部の一画には中華街が形成された。

1960年代になると、ビエンチャンにおいてアメリカの影響が強まった。アメリカはラオスを東南アジアの共産化を防ぐための戦略上の拠点と考えた。1962年にビエンチャンには、フランス人とほぼ同数の約2,000人のアメリカ人がいた。アメリカはラオスを防共の砦とすべく、多額の資金をつぎ込んだ。そうした金は政府軍や警察組織の維持に使われたが、近代都市を資本主義の宣伝として使うためにビエンチャンの都市整備にも使われた。市の中心部から東に6kmのところには、Km6と呼ばれるアメリカ人居住地区(アメリカ村)が建設された。地区全体が塀で囲まれ、中には、芝生の庭のある家が並び、テニスコート、スイミングプール、自家発電施設があった。そして、これらの家には、フィリピン人の家政婦が雇われていた。

アメリカのプレゼンスの増大は都市に新しい娯楽をも

たらした. バー, ナイトクラブ, カジノ, 映画館, ボー リング場がビエンチャン市内に立地し、郊外にはゴルフ コースもあった、とはいえ、当時の特異な社交場は、ホ テル・コンステラシオンである (写真3). フランス人 の父と中国人の母によって中国の昆明で生まれたモーリ ス・キャヴァレリーが経営するこのホテルのバーは、大 使館員、外国特派員、パイロットなどが出入りし、情報 交換の場であった. ときには東西冷戦のスパイ合戦も 行われたであろう. 『陽はメコンに沈む』(伴野1977), 『ス クールボーイ閣下』(ル・カレ 1979) という日英のスパ イ小説にこのバーは登場する. 青山(1995)によれば、「第 二次ジュネーブ協定に基づいた連合政権が成立したころ (筆者注:1962年頃)のビエンチャンは奇妙な街であっ た. 中立派のプーマ政権下で、右派国王軍が公然とアメ リカからの援助を受けているなかで、左派のパテトラオ の代表が存在し、北ベトナムも中国も大使館を設置して いた.」ホテル・コンステラシオンは、東西冷戦の最前 線の首都にふさわしい社交の場であった.

こうした華やかな社交や娯楽,そして退廃は,ラオスの大部分を占める農民にとって全く無縁だった.資本主義をラオスに根付かせるため,ビエンチャンを拠点に市場経済を国内に広げようとしたアメリカの試みは失敗した.ビエンチャンのすぐ近くでさえ,人々は天水田耕作と狩猟採集による自給自足的な生活を送っていた.彼らにとって,ビエンチャンは異邦人の世界であった.Askew,M.et al(2007)には,1959年のワシントンの公聴会での次のようなやりとりが掲載されている.

Howell 氏:「小都市の外側の住む人々は、プラクティカル に生存レベルであり、西側からもたらされる商品を 買おうという潜在的な望みを持っていません.」

Hardy 氏:「彼らが使うことができない商品という意味か?」 Howell 氏:「ちょっと違います.多くの国では,人々は,

> 自分たちが何を持ちたいかという明確な考えを 持っていると思います.単にそれを得るための手段・ 金を持たないだけです.ラオスの多くの地域では、 人々は物が存在していることを知らなかったので す.そこには何の需要もありません.彼らは完全に 満足しているのです.」

Ⅲ 日本で描かれた内戦下ビエンチャンの景観

本稿の冒頭で紹介した劇画ゴルゴ13シリーズ『ラオスのけし』が発表されたのは1971年である. 当時のラオスは国内ではラオス王国政府軍とパテトラオ(ラオス愛国戦線の戦闘部隊)が内戦状態にあり、隣国では、ベ

トナム戦争が激化し、カンボジアでも内戦が勃発していた。アメリカ軍は北ベトナムの勢力拡大を抑えるために、ラオス東南部のいわゆるホーチミンルートやラオス北部のラオス愛国戦線の支配地域を空爆していた。アメリカ軍はラオス領内に、1973年の爆撃停止まで、第二次世界大戦中にアメリカ軍が欧州と太平洋戦線で落とした量に匹敵する爆弾を落とした(綾部・石井 1996)。

このような状況下で、ゴルゴ13の原作者はどのようにして、当時のビエンチャンについての情報を得たのか、調べてみると、1960年代後半から70年代前半にかけてビエンチャンに相当数の日本人がいたらしいことがわかった。彼らが、ビエンチャンの情報を日本にもたらした可能性があった。

当時ビエンチャン市やその周辺に滞在していた日本人グループの第1は、大使館や青年海外協力隊など日本政府の関係者である。ラオスは、青年海外協力隊の最初の派遣先の一つであり、1965年に日本語教師が派遣された。そして、ビエンチャン技術学校や東京銀行ビエンチャン支店などで日本語を教えた。また、現在ラオス国立大学のあるドンドク地区にあった師範学校には、日本語教室のほか生け花教室もあった(JICA 2005)。

第2のグループは、日本の商社や銀行のビジネスマンである。ビエンチャンには、東京銀行ビエンチャン支店のほかいくつかの商社の支店や駐在員事務所があった。

第3は、ナムグムダム建設の関係者である.ナムグムダムはメコン河の支流グム川(ナムグム)に建設されたダムで、ビエンチャンの北方約60キロに位置する.広大な貯水池面積370km²(琵琶湖の約半分)を持つダムであり、水力発電された電力はラオス国内だけでなくタイに輸出され、ラオスの重要な外貨獲得源となってきた.日本を含む8か国の資金援助によって第1期建設工事(1967年-72年)が始まったが、それ以前から日本の建設企業が調査・設計・施工管理に加わっていた.ラオスは内戦下にあり、ダムによって水没する村々も政府軍が支配する村とパテトラオ支配下の村に分かれていたが、ダムの建設現場周辺は中立地帯とされ、日本の技術者らによって建設がすすめられた(日本工営株式会社1996;松本1997).

そのほか、布教やボランティア活動を行う天理教などの宗教関係者、さらにアメリカ軍主導で建設された国道13号線建設の労働力に徴用された当時アメリカ占領下にあった沖縄の人々などがいた(吉田 2006).

これらの日本人からの情報のほか、当時のビエンチャンの雰囲気を広く日本人に伝えた可能性があるのが、松本清張の小説『象の白い脚』である. これはビエンチャ

ンを舞台にした小説で、松本は取材のために 1969 年に ビエンチャンを訪れた. 初めは『象と蟻』というタイト ルで『別冊文芸春秋』に連載 (1969 年 -70 年) されたが、 のちに『象の白い脚』と改題された. ここで、象はラオス、 白い脚はアメリカの CIA のことである. ラオスの最初の 統一国家は 1353 年にルアンプラバンで建国したランサン王朝であるが、ランサンとは「百万頭の象」という意味であり、象はラオスの象徴である. そのラオスにアメリカが白い脚を伸ばしているという意味である.

この小説で、ビエンチャンは次のように語られる.「(飛行機から)市街が識別できた.川の一方のふちに細長く灰色のカビのようにとりついている.」「この首都の風景には前近代的なものが停滞していた.田舎町が時世で少しはかたちを整えてきたという感じである.・・・これほど田舎くさい首都とは思わなかった.」「このビエンチャンは未発達の町というだけでなく、空港から通ってきた印象だけだが、どこか咲き損ねの隠花植物のような感じがする.それも毒々しい花ではなく、日陰にある色のない感じである」(松本 1973).

当時のビエンチャンには夜の歓楽地が数多くあった. 「特にドンパラン界隈には、ヴィトナム人、中国人、タイ人などが経営しているバーが数え切れないほど密集していた. ここでくり広げられた享楽は、酒と女と売春とカジノであった. さらに奥に踏み込むと阿片窟があり、麻薬が横行していた. 乾燥大麻は公然と店頭で売られヒッピーが集まっていた」(青山 1995). このような舞台で、『象の白い脚』の物語は進行する.

ビエンチャンは東西冷戦の最前線であり、そのためか不思議な均衡が保たれていた。松本清張がビエンチャンを訪れた1969年頃でも、ビエンチャンにはラオス愛国戦線の代表部があり、大使館もアメリカ、イギリス、フランス、日本など西側諸国だけでなく、ソ連、中国の大使館があった。北ベトナムと南ベトナムの両方の大使館もあった。国内で内戦や空爆が繰り広げられる中で、ビエンチャンは比較的平穏であった。

1960年代の日本の地誌書は内戦下ビエンチャンを次のように描いた.「インドシナ半島におけるラオスの政治・軍事的重要性は、第二次世界大戦の後、急速に認められてきた.また、今日の後進国への援助競争ともあいまって、首都ビエンチャンへ、国連の諸機関や、各種商社の進出が著しく、市内には国際色がみなぎり、ブーム=タウンの様相をさえあらわしている.市内に残る伝統的な古建築やラオス固有の風俗調にまじって、外国製の高級車がはしり、近代的ビルが立ちならぶ姿は、まさに国際都市であることを表している(世界地理風俗大系編

集部 1963).」「しかし、一方、こうした近代建築のすぐそばで、スイギュウが悠々と水浴びをしていたり、木造の粗末な民家がひしめきあったりしていて、いかにも新開地といった風景を展開している。(鈴木 1964)」

IV ラオス人民民主共和国成立以後の景観

1975年4月にプノンペンとサイゴンが陥落すると、ラオスの政府高官や軍人たちがメコン川を渡り、タイに脱出し始めた. アメリカ人は4月には1,200人いたが、5月には200人以下に減少した(Askew et al 2007). その年の12月、ついにビエンチャンはパテトラオに占拠され、内戦が終結、人民革命党一党独裁のラオス人民民主共和国がスタートした.

共産主義政府の成立以後も、西側諸国の政府関係者は ビエンチャンに滞在していたが、徐々に撤退した。日本 の JICA も 1976 年に撤退した(JICA 2005)。アメリカ 人居住区だった Km6 はパテトラオに占拠され、人民革 命党のオフィスに変わった。バーやナイトクラブはしば らく営業していたが、閉鎖させられた。西洋的な退廃を 一掃するキャンペーンによって、数千の売春婦や麻薬中 毒者などが、ナムグムダムによって出来たナムグム湖の 中の島に設置された再教育キャンプに送られた(Askew et al 2007)。

アメリカ人に代わるビエンチャンの新しい顔はベトナム人とソ連人のアドバイザーと軍人たちであった. ベトナム人は、それまでも中国人とともにビエンチャンの商業の主要な担い手であった. しかし、人民民主共和国が成立すると、1976年中頃までに、ビエンチャンに住んでいた2万人の中国人と1万5千人のベトナム人の半数が資産を釜に変えて去った(Shaplen 1976、スチュアート-フォックス 2010). 代わりに入ってきたベトナム人は、ベトナム共産主義政府が派遣した政治顧問団や軍事顧問団であった. ソ連も1978年に2,000人の技術者を派遣した(Askew et al 2007). 筆者が2003年に初めてビエンチャンに行き、泊まったホテル(ランサン・ホテル)では、ソ連製のクーラーがまだうなりを上げながら動いていた.

1980年代になると、多くの社会主義国で苦境に陥った経済を立て直すために、市場経済の導入が試みられるようになった。1985年のソ連のペレストロイカに続き、1986年に、ベトナムはドイモイ、ラオスはチンタナカーン・マイ(新思考)を提唱し、経済開放の道を歩むことになった。1989年のベルリンの壁崩壊とそれに続くソ連・東欧の動乱によって、これらの諸国からのラオスへ

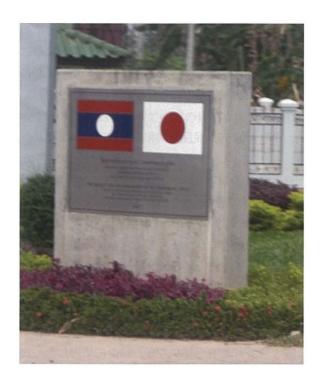


写真4 ビエンチャン・ワッタイ国際空港入口の記念碑 (2010年3月29日 著者撮影)

空港のターミナルビルが日本の援助で建設された。こうした日本国旗の露出がラオス人にどのような感情を抱かせるのか定かではない。かつてラオス人の一人が筆者に、「ラオスには新空港建設の計画がある。今の空港は日本が造った雰囲気が強すぎる。ラオス人は自分たちの空港を造るのだ」と言ったことがある。新空港の計画については、Vientiane Times 2010 年 5 月 4 日 (http://laovoices.com/2010/05/04/delays-dog-vientianes-new-airport/) 参照

の援助が途絶したことは、ラオス経済に深刻な打撃を与えた. 1990年になると、ラオスは日本を初めとする西側諸国に援助を依頼せざるを得なくなった.

1990年、日本の青年海外協力隊がラオスへの派遣プログラムを再開した。それ以降、日本はラオスにとって最大の援助国となった。ビエンチャン市内の空港や道路には、日本国旗をつけた建設記念碑があり、それらの施設が日本の ODA によって造られたことを示している (写真4).

2000 年代後半に入り、ラオスへの援助国として中国と韓国が急速にその地位を上げてきた。特に近年の中国のプレゼンスには目を見張るものがある。2009 年にビエンチャンでシーゲーム (SEAGAME: South East Asian GAMEs の略)と呼ばれる東南アジア諸国連合(ASEAN)のスポーツ大会が開催された。メインスタジアムは、中国の援助で造られた。建設は雲南建工という中国雲南省の企業が担当し、中国は、建設資金だけでなく3千人の建設労働者を派遣した。この見返りに、ラオス政府はタートルアン寺院(写真2参照)の東側に広がるタートルアン湿地の開発権を中国企業に与えた(山田 2008)。ビエ

ンチャン市民の間では、これは中国人街の建設事業であり、5万人以上の中国人が移住してくるとの噂が広がった(山田 2009; 日本経済新聞 2009 年 7 月 26 日朝刊). 候補地となったタートルアン湿地は、生物多様性に恵まれ、稲作や漁撈が行われ、周辺農村の水源にもなっている(Gerrard 2004). 2010 年 3 月の政府系研究機関所員への聞き取りによれば、市民の反発のために、政府はタートルアン湿地での中国人街建設を断念したが、建設計画がなくなったわけではなく、他の候補地を探しているとのことであった.

中国の存在感は、特にラオス北部で強まっている. タイ・ミャンマーと国境を接するボケオ県 (Bokeo Province)では、中国が30km²の土地を99年間租借する契約をした. これ以上の土地の租借があるとか10万人の中国人移住計画があるとか様々な噂がある. こうした状況に警戒感をいただくラオス人がいる一方で、そもそも東南アジア諸国は中国系住民が多いことを挙げ、ラオスが発展著しい中国(特に雲南省)と ASEAN との架け橋になることを期待する意見もある (Lao Insight Books 2009). 2007年から 2008年にかけて、中国はタイを抜いてラオスへの最大の投資国になった(スチュアート・フォックス 2010).

V おわりに

最後に、ビエンチャンの象徴的な景観とその変化の兆しを見ておく。1975年に刊行された文化誌世界の国シリーズ第3巻『東南アジアI』には、ビエンチャンの見どころとして、「市内これといった中心街はなく、北東部の朝市場、西部の夜の市場などが人々が多く集まる場所になっている。・・・そのほかとくに名所旧跡というものはないが、メコン川のほとりから北方タイ国を眺める夕焼けはとくに美しい。(講談社1975)」(筆者注:「北方」は「南」の間違い)。この地誌書は、内戦下のラオスを扱っているにもかかわらず、ラオスを「アジアの桃源郷」と表現し、次のように記す。「ラオスを訪れた人は必ず言う、『なんと人なつっこい淳朴(じゅんぼく)な人たちだろう。いまどきの世界によくもこんなのどかな別天地が残っていたものである』と」(講談社1975)

メコン川の夕日は今でも美しい. 近年のビエンチャンへの外国人観光客の増加は著しく,タイ人観光客は,メコン川に架かる友好橋を通って,バスを連ねてビエンチャンを訪れる. また,欧米人や日本人のバックパッカーも多く,カフェやレストランが立ち並ぶナンプー(噴水広場)周辺は「バックパッカー・エンクレーブ」といっ



写真5 メコン河畔の開発(2010年3月29日 著者撮影)

乾季で水量の下がったメコン川(右手)にブルドーザーが入っている。向こうに見える白い高層の建物がドンチャンパレス・ホテル、メコン川の護岸整備は、韓国輸出入銀行からの3,720万ドルの低金利融資を受け、ビエンチャン遷都450周年記念事業の一つとして始まった。写真撮影時には、まだ飲食用のテーブルが置かれていたが、このあと、テーブルの場所には高い堤防が築かれ、ドンチャンパレスまでの一帯は遊歩道付きの公園となった。そして、公園には1820年代にタイからの独立をかけて戦ったラオスの英雄アヌ王の銅像が建てられた。アヌ王の銅像は、対岸のタイを向き、右手を掲げて立つ。

ても過言ではない。旅行者の目当ての一つが、メコン川に沈む夕日である。彼らは、川端に並ぶテーブルでビアラオというビールを飲みながら、夕暮れのひとときを楽しむ。対岸にはタイの民家の明りが見える。メコン河畔には高い建物はなく、野趣ある広々とした風景を楽しむことが出来た。

ところが、2004年にこのメコン川の中州に、高層のドンチャンパレス・ホテルが建った。その年の ASEAN 首脳会議は、このホテルで開かれた。ホテルの経営者は中国系マレーシア人で、建設許可はビエンチャン市の都市計画局ではなくラオス人民革命党の上層幹部によって与えられた。このホテルの建設は、植民地時代からほとんど変化の無かった自然の残るメコン河畔の環境破壊のシンボル(Askew et al 2007)であり、筆者も、これで風景が台無しになったと感じた。一方、ラオス国立大学地理学科の教員の一人に「ドンチャンパレスをどう思うか」と筆者が尋ねたところ、「都市が発展している感じがする」と肯定的な答えが返ってきた。

2010年春にビエンチャンを訪問すると、韓国企業によってメコン河畔にブルドーザーが入り、新たなウォーターフロント開発が始まっていた(写真 5). 護岸工事やリバーサイド公園・道路の整備である. ビエンチャン

のメコン河畔の景観は大きく変わろうとしていた.

こうした変化をどう考えればよいのか. せっかくの趣きのあったメコン川の景観が失われていくのは残念である. しかし, その「趣き」とは何であったのだろうか. アジアと欧米の雰囲気がミックスされた熱帯の植民地都市の河畔. かつての地誌書 (講談社 1975) が語るラオス人の淳朴さに重ね合わされるメコン川の素朴さ. ビエンチャンの景観は, 植民地時代はフランスによって, 冷戦時代はアメリカによって, 大きな影響を受けてきた. そして, 現在は, アジア諸国の資本によって, 大きく改変させられているかのように見える. しかし, 少なくとも現在の景観の変化は, かつてと異なってラオス人自身の意志によるものだと認めなければならない.

注

- 1) モーリス・キャヴァレリーの生涯については、彼の娘婿でありラオス史の研究者であるマーチン・スチュアート フォックスの書いた弔辞に詳しい. http://madtomsalmanac.blogspot.com/2010/04/last-of-great-indochinese-hoteliers.html (2010年12月2日閲覧)
- 2) 1970年のラオスで、3ヶ月以上の長期滞在をしている日本人は327人であった(外務省『わが外交の近況 昭和46年版』).

3)ラオスのバックパッカー・エンクレーブについては、横山 (2007) 参照.

文献

- 青山利勝 1995 『ラオス:インドシナ緩衝国家の肖像』,中公新書. 綾部恒雄・石井米雄 1996 『もっと知りたいラオス』,弘文堂.
- 講談社 1975『東南アジア I (文化誌世界の国第3巻)』, 講談社. さいとうたかお 1974『ラオスのけし(SPコミックス ゴルゴ 1 3第9巻』, リイド社.
- 鈴木二郎・岩田慶治・石川栄吉編 1964『東南アジア(世界の文化 地理第2巻』, 講談社.
- スチュアート フォックス,M. (菊地陽子訳) 2010『ラオス史』, めこん.
- 世界地理風俗大系編集部 1963『インドシナ半島(世界地理風俗体系第8巻)』,成文堂新光社.
- 日本工営株式会社 1996『日本工営 50 年史』, 日本工営株式会社, 303p.
- 林育夫 1998「「ラオ」の所在」, 東南アジア研究, 35, 684-715. 伴野朗 1977『陽はメコンに沈む』講談社.
- 松本悟 1997 『メコン河開発 -21 世紀の開発援助 -』, 築地書館, 179p.
- 松本清張 1973 『屈折回廊・象の白い脚(松本清張全集 22)』,文 藝春秋.
- 山下清海 2006「ラオスの華人社会とチャイナタウンービエンチャンを中心に一」,人文地理学研究,30,127-146.
- 山田紀彦 2008 2007 年のラオス:政治の安定と進む経済発展」, アジア経済研究所編『アジア動向年報 2009』,アジア経済研 究所, 252-266.

- 山田紀彦 2009「2008 年のラオス: 転換期を迎えた経済開発」, アジア経済研究所編『アジア動向年報 2009』, アジア経済研 究所, 233-250.
- 横山 智 2007「途上国農村におけるバックパッカー・エンクレーブの形成ーラオス・ヴァンヴィエン地区を事例としてー」, 地理学評論, 80, 591-613.
- 吉田裕彦 2006「天理参考館収蔵のラオス標本と天理教名古屋大教会のラオス伝道について (3)」、『アジア・熱帯モンスーン地域における地域生態史の統合的研究 1945-2005, 2005 年度報告書』、総合地球環境学研究所, 440-443.
- ル・カレ J. (村上博基訳) 1979 『スクールボーイ閣下』, 早川書房. JICA 2005 「JICA の日本語教育協力の事例報告―ラオス・カンボジア・ベトナム―」独立行政法人国際協力機構青年海外協力隊事務局.
- Askew, M., Logan, W.S. and Long, C. 2007. *Vientiane:* transformations of a Lao landscape, Routledge.
- Lao Insight Books 2009. *Laos : an indicative fact-book*. Lao Insight Books.
- Messerli P., Heinimann A., Epprecht M., Phonesaly S., Thiraka C., Minot N, eds. 2008. *Socio-Economic Atlas of the Lao PDR. An Analysis based on the 2005 Population and Housing Census*. Swiss National Centre of Competence in Research (NCCR) North-South, University of Bern, Geographica Bernensia
- Pauline,G. 2004. *Integrating Wetland Ecosystem Values into Urban Planning: The Case of That Luang Marsh*, Vientiane,Lao PDR. http://www.mekongwetlands.org/Common/download/WANI_economics_ThatLuang Marsh.pdf
- Shaplen, R. 1976. Letter from Laos. *The New Yorker* (August 2, 1976), 64-76.